西洋史の授業とアクティブ・ラーニング
－西洋文明論 I, II を中心に－

青柳　かおり（教育学部）

【要旨】近年、大学の授業においてアクティブ・ラーニングを取り入れることが求められている。西洋史の分野でも、講義形式のみならず、学生による発表、討論、問題解決といった活動を通した学生主体の学習の取り組みを導入することが可能であろう。筆者は西洋文明論 I, II のクラスにおいてアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を試みた。本稿では、このクラスでどのような取り組みを行ったのか、学生の歴史理解および異文化理解にどのような効果がみられたのかを検討する。また、テーマ設定、プレゼンテーション、質疑応答における課題を挙げ、より充実した学生の主体的な学び、対話的な学びを実現するための工夫について提案したい。

【キーワード】西洋史　アクティブ・ラーニング　プレゼンテーション　異文化理解

１．はじめに

西洋文明論 I, II は教育福祉科学部情報社会文化課程社会文化コース三年生の必修科目であり、I は前期に、II は後期に実施された。2016 年度の履修者は I, II ともに 14 人であった。この授業は以前は講義形式で行っており、I ではイングランドを中心としたヨーロッパ宗教改革について、II ではイギリス領アメリカ植民地の歴史と宗教について講義していた。その際はパワーポイントや西洋史に関する映像を使用して専門的知識を得られるように努めていたが、学生による発表やディスカッションは行っていなかった。しかし、受講者の西洋史についての興味は多様であり、また、近年は大学の授業においてアクティブ・ラーニングを取り入れることが求められている。溝上氏によれば、アクティブ・ラーニングとは「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」とされている[1)]。このため、この授業では三年前から受講生による発表形式に変更した。受講生は全員が自分でテーマを選び、時間外に調査を行って準備し、プレゼンテーションを行うことになったのである。また、質疑応答や討論も行い、他者との対話やコミュニケーション能力および西洋史についての深い理解を得られるようにした。期末レポートも課し、歴史や文化への理解をより深め、文章作成能力を高められるようにした。本稿では、西洋史の授業においてこのような試みをどのように進めたのか、どのような効果がみられたのか明らかにするとともに、今後の課題についてまとめたい。

２．西洋文明論Ｉの授業の概要

西洋文明論 I のシラバスは以下の通りである。

＜授業のねらい＞
ヨーロッパ、特に EU 加盟国を中心に、歴史、文化、宗教、社会、政治経済などを考察し、ヨーロッパ文明の特質とは何かを理解する。
世界史についての専門的知識を活用し、さまざまな情報を適切に判断して問題解決に取り組む能力の充実を図る。
＜具体的な到達目標＞
ヨーロッパの社会や宗教などに関する知識を獲得し、その歴史を理解する。
ヨーロッパ文明に関してテーマを設定し、調査・報告・質疑応答・レポート作成を行う。
多様な文化に関する幅広い教養を身につけ、西洋史に関する深い知識を修得する。
専門的な知識を活用し､国際化社会の変化や要請に柔軟かつ的確に対応できるようになる。
＜授業の内容＞
１．ガイダンス
２．個人発表の準備、資料収集
３．報告とディスカッション
＜時間外学習＞
関心のあるテーマについて資料収集を行い、文献を読み、報告の準備をする。個人発表をレポートにまとめる。
毎回の報告内容についてミニレポートを課す。
＜教科書＞
使用しない。
＜参考書＞
適宜、指示する。　『世界年鑑』
＜成績評価方法及び評価の割合（％を明示）＞
平常点（プレゼンテーション、毎回の発言の内容）60%、ミニレポート 20%、学期末レポート 20%
一人 15 分発表し、約 25 分質疑応答。
　以上である。

　初回の授業では次のような注意事項を書いた用紙を配布し、受講者一人につき一カ国、調査する国の担当を決めた。

ヨーロッパ諸国の中から一つの国を選び、自由にテーマを考えて調査する。歴史上の事件、人物、文化、社会、現代の問題など。
候補 20 か国：
オーストリア共和国、ベルギー王国、デンマーク王国、フランス共和国、ドイツ連邦共和国、ギリシャ共和国、ハンガリー共和国、イタリア共和国、オランダ王国、ポーランド共和国、ポルトガル共和国、スペイン王国、スウェーデン王国、フィンランド共和国、イギリス、アイルランド、ルーマニア、スロバキア（以上、EU 加盟国）、ロシア、スイス連邦

A4 のレジュメを 2〜3 枚　15 人分用意する。タイトル、氏名、概要、目次、図版など、文献リスト 5 冊以上を書いてください。
インターネットで調べてもよいが、研究書を必ず 5 冊以上読んで使用すること。（学術論文でもよい。）
信用できないサイト、旅行ガイドブック、エッセー等は絶対に使用しない。
Power Point を使用する場合は USB メモリを持参してください。
質疑応答：　全員参加する。どれほど積極的にクラスに参加したかを重視する。
　以上である。
　学期の終わりの方では、以下のように期末レポートの課題を提示した。
「レポートの課題」
授業中に個人で発表した内容をまとめる。発表した時になされた質疑応答も参考にして、発表後に調べたことを入れて内容を改良して書いてください。
・書き方の規定
Word で作成する。
A4 の用紙に 40 字×36 行で設定する。（1 枚 1440 字）　10.5 pt
表紙はつけず、1 枚目の上に、学生番号、氏名を明記する。
タイトルを書く。文章は見出しをつけて書いてください。
インターネットなどからのコピー＆ペーストは絶対にしないこと。
必ず実際に読んだ本を記載した参考文献リストを最後につける。最低 5 冊以上。
読んでいない本をリストに挙げるのはやめてください。
著者（編集者、翻訳者）『書名』出版社、出版年。
本文の分量は 5600 字程度（約 4 枚分）。
図版やグラフをつけてもかまわないが、参考文献リストや図版等は本文には含めない。
最後はまとめ（結論）を書き、感想文は書かないでください。
　以上である。

西洋文明論 I において、学生が選んだテーマは以下の通りであった。
1 ポルトガルと豊後　〜南蛮文化〜
2 水の都ヴェネツィア（イタリア）
3 スウェーデン・ヴァイキングの活動
4 ドイツの食文化
5 ロシア革命
6 ウィーンのカフェ文化
7 オランダの教育
8 オリンピックの歴史（ギリシャ）
9 ベルギーの街と猫祭り
10 イギリスとスポーツ
11 スイスにおける永世中立について
12 世界一幸福な国デンマーク
13 カタルーニャの歴史と文化（スペイン）

14 フランスとモン・サン・ミシェル

第二回目以降、数回の授業では、それぞれのプレゼンテーションにむけた準備をすすめることとし、各自が図書館で文献を借りて調べ学習を行い、筆者が全員にアドヴァイスを行った。一回の授業につき二名の学生に報告してもらった。パワーポイントを使用するかは自由であるが、全員にレジュメを配布させた。すべてのレジュメやレポートにおいて、最初に１）概要、２）その国の地理、気候、面積、人口、宗教等の基本情報を、最後にまとめ（結論）を書く構成にした。

それぞれの報告で述べられた項目は以下のようである。

・「ポルトガルと豊後　～南蛮文化～」南蛮文化とは、日本に伝来したもの、フランシスコ・ザビエル、府内・南蛮文化の中心地へ
・「水の都ヴェネツィア（イタリア）」ヴェネツィアの概要、現代のヴェネツィアにおける問題と対立、ヴェネツィア共和国の誕生、繁栄、衰亡
・「スウェーデン・ヴァイキングの活動」スウェーデンの一般事情、スウェーデンの略史、ヴァイキングとは何か、スウェーデン・ヴァイキングの活動、ヴァリャーグ問題とは何か、スウェーデン・ヴァイキングの終焉（8 世紀～12 世紀）
・「ドイツの食文化」ドイツの食文化における食材、ドイツの地理・気候・農業、ドイツの食文化の歴史、ジャガイモ
・「ロシア革命」　二月革命の経緯、結果と影響、十月革命の経緯、結果と影響
・「ウィーンのカフェ文化」ウィーンのカフェ、ザッハトルテ戦争
・「オランダの教育」教育の自由、教育制度、初等教育、中等教育、オルタナティブ教育
・「オリンピックの歴史（ギリシャ）」オリンピックの誕生（近代、古代）、ヘレニズム文化とは、オリンピック開催が四年に一度の理由とは、古代オリンピックの最初の競技、女人禁制、古代と近代オリンピックの違い、古代オリンピックの終焉
・「ベルギーの街と猫祭り」猫祭りとは、イーペルの歴史、イーペルの戦い、疫病と猫、魔女狩りの起源と終焉、猫が魔女の使いとされている理由
・「イギリスとスポーツ」スポーツの発祥（フットボール、ラグビー、クリケット、ポロ）、現代における重要な問題点
・「スイスにおける永世中立について」スイスの内情、スイスと永世中立の歴史、中立の影響と有事の際の対策
・「世界一幸福な国デンマーク」高い税金と充実した福祉、デンマークの教育、デンマークの高齢者福祉、デンマークの影の部分、偏った食生活による生活習慣病、飲酒・薬物濫用・抗うつ剤消費
・「カタルーニャの歴史と文化（スペイン）」カタルーニャ王国の成り立ち、カタルーニャの盛衰、カタルーニャと闘牛、カタルーニャの音楽文化、カタルーニャが生んだ建築家
・「フランスとモン・サン・ミシェル」モン・サン・ミシェルとは、世界遺産登録の条件、モンの歴史、聖ミカエル、ベネディクト会、ラ・メルヴェイユ、現在のモン、モンの海洋性復興計画

３．西洋文明論 II の授業の概要

西洋文明論 II のシラバスは以下の通りである。
＜授業のねらい＞
ヨーロッパとその他の地域（アメリカ、アフリカなど）との異文化交流に関する問題を検討し、ヨーロッパと他地域それぞれの特質、相互に受けた影響を学ぶ。
世界史についての専門的知識を活用し、さまざまな情報を適切に判断して問題解決に取り組む能力の充実を図る。
＜具体的な到達目標＞
ヨーロッパおよび他地域の文化、社会、政治、宗教に関する知識を獲得する。
ヨーロッパおよび他地域に関してテーマを設定し、調査・報告・質疑応答・レポート作成を行う。
多様な文化に関する幅広い教養を身につけ、西洋史に関する深い知識を修得する。
専門的な知識を活用し、国際化社会の変化や要請に、柔軟かつ的確に対応できるようになる。
＜授業の内容＞
１．ガイダンス
２．個人発表の準備、資料収集
３．報告とディスカッション
＜時間外学習＞
関心のあるテーマについて資料収集を行い、文献を読み、報告の準備をする。個人発表をレポートにまとめる。
毎回の報告内容についてミニレポートを課す。
＜教科書＞
使用しない。
＜参考書＞
適宜、指示する。　『世界年鑑』
＜成績評価方法及び評価の割合（％を明示）＞
平常点（プレゼンテーション、毎回の発言の内容）60%、ミニレポート 20%、学期末レポート 20%
一人 15 分発表し、約 25 分質疑応答。
以上である。

西洋文明論 II ではヨーロッパのみならず、中東、アフリカ諸国、北米、南米諸国の中から一つの国を選び、自由にテーマを考えて調査するという内容にした。候補に挙げた 20 か国は以下のようである。サウジアラビア、イラン、イラク、ヨルダン、イスラエル、イエメン、シリア、エジプト、モロッコ、チュニジア、トルコ、南アフリカ共和国、カナダ、アメリカ合衆国、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン、ペルー、キューバ、インド、（ヨーロッパ）
西洋文明論 II は基本的に西洋文明論 I と授業形式は同じであるが、I では扱う国をヨー

ロッパに限定していた。西洋にはアメリカ、南米も含まれると思われるので、IIではIで触れられなかった北米、南米、および中東やアフリカ諸国も対象範囲にした。I に引き続きヨーロッパ各国について調べると重なる部分が出てくるため、なるべく多くの違う国についての発表があった方が有意義であろうという考えもあった。現代社会においてそれらの国の重要性は増しており、中東・アフリカについての知識も必要である。一方、過去にはどうしてもヨーロッパの国を調べたいという学生もいたため、西洋文明論Iで選ばれなかった国を対象に許可したこともある。

以下、西洋文明論IIにおいて受講者が選んだテーマである。

1 アフガニスタンの地雷問題
2 多民族国家アメリカ合衆国
3 メキシコとトウモロコシ
4 ブラジルとサッカー
5 他民族国家カナダ
6 アルゼンチンの農業[2)]
7 イスラエルとパレスチナ問題
8 モロッコの伝統料理
9 エジプトの変遷
10 日本とトルコの関係
11 サウジアラビアの女性
12 アパルトヘイト政策と現代（南アフリカ共和国）
13 カレーライスとインドのカレー[3)]
14 ペルーの世界遺産マチュピチュ

それぞれの報告の内容を示すと以下のようである。

・「アフガニスタンの地雷問題」イギリスからの独立後のアフガニスタン、地雷の現状と埋設の発端、ソ連侵攻、地雷の歴史、地雷の対策、学生からの質問に対して
・「多民族国家アメリカ合衆国」アメリカ合衆国の人種について、アメリカにおける人種差別、黒人の街ニューヨーク、ハーレム、人種差別と戦ったアフリカ系アメリカ人
・「メキシコとトウモロコシ」トウモロコシ、トルティーヤ、トルティーヤの起源、スペイン進出前のメキシコとトウモロコシ、スペイン進出後のメキシコとトウモロコシ、現代のメキシコとトウモロコシ
・「ブラジルとサッカー」ブラジルのサッカーの歴史、ブラジルの文化とサッカーの関係、ストリートサッカー、ジンガ、勝利と芸術サッカー、フットサル、貧困とサッカー、自国開催ワールドカップの悲劇（第4回大会 1950、第20回大会 2014）
・「他民族国家カナダ」ケベック問題、先住民族インディアンとイヌイット、移民史のはじまり、カナダの多文化主義への道、先住民による土地請求とケベック問題
・「アルゼンチンの農業」アルゼンチンの文化形成について、農業国アルゼンチンの側面、ガウチョについて、農業における環境破壊
・「イスラエルとパレスチナ問題」パレスチナ問題とは、歴史的背景、経緯、バルフォア宣言とは、シオニズムとは、アレクサンドル二世について

・「モロッコの伝統料理」モロッコの伝統的な調理器具、モロッコでよく使われる食材、モロッコの伝統料理、モロッコのお茶
・「エジプトの変遷」古代エジプトの歴史、ローマ、ビザンツ帝国属州時代、イスラム時代、コプト教の概要と発生、イスラム時代・近代
・「日本とトルコの関係」エルトゥールル号事件とは、日本からトルコへの対応、義捐金とトルコを訪ねた日本人、イラン・イラク戦争にみる現在の日土関係
・「サウジアラビアの女性」ワッハーブ派とは、イスラム教から他宗派への改宗、女性が禁止されていること（運転、男女共学、男女同席、男女交際）、サウジアラビアの結婚事情、他宗派からのイスラム観
・「アパルトヘイト政策と現代（南アフリカ共和国）」アパルトヘイト政策、四つの概念 1 白人、2 カラード、3 インド人、4 アフリカ人、アパルトヘイトの影響、アパルトヘイトの崩壊、ネルソン・マンデラ、現代の問題
・「カレーライスとインドのカレー」カレーライスができた理由（イギリス植民地インド、イギリスから日本へ）、カレーの起源、カレーにつけて食べるナンの起源とその魅力
・「ペルーの世界遺産マチュピチュ」マチュピチュ概要、マチュピチュの代表的な建造物、マチュピチュに住んでいた人々

４．授業の考察

①テーマ設定

例年の本授業のアンケートでは、自分の興味のあることを自由にテーマに選べる点が評価されており、学生が意欲的かつ主体的に取り組むことができたと思われる。また、毎年、発表の準備をしてこなかった学生やテーマが見つからないというような学生もなく、おおむね興味深い適切なテーマを設定して発表を行った。全員に異なる国を一つ選択させ、同じ国は扱わないようにしたためか、テーマは多様であり、質疑応答も活発で学期の最後まで興味深く授業を行うことができた。しかし、自由である分、テーマの難易度にばらつきが見られた。政治・経済・国際関係的なテーマや難解なテーマも選択されているが、年によっては料理や食材関係のテーマが多くなる傾向がみられた。例えば、過去のテーマも入れると、フランスのお菓子、ザッハトルテ、ドイツ料理、メキシコ料理、インドのカレー、モロッコ料理などである。また、決まったテーマになりがちな国もあった。例えば、イギリスを選ぶとイギリス料理をテーマにする学生が多くなり、キューバを選択するとキューバ革命、ペルーを選択するとマチュピチュをテーマとすることが多い。また、概して各国の学校教育制度を選択する傾向もあった。

今後の課題として、初回の授業で担当の国を決めるだけではなく、学生に興味のあるテーマを発言させたり、用紙に書かせて提出してもらい、教員の方である程度チェックすることも必要かと思われた。そうすることで、問題がある場合はテーマを指定したり、適切なものに変更したりすることが可能である。

一方、たとえロシア革命のような重大な政治的事件を扱っても、調べが足りず参考書を書き写しているような、よく理解していない発表もあった。その場合は、まず用語や年号や人物といった事実関係についてこちらから質問し、分からない部分は再調査させた。逆

に、特定のお菓子や料理の作り方についてなど小さいテーマを扱い、内容が薄くなる発表もあった。その場合はその時代の歴史的背景、当時の政治問題、社会問題等を取り入れ、テーマを深めるように指導した。質疑応答においては、レジュメに書いた事柄について説明できない学生も多かった。そのため、それらについて詳しく調査し直すように課題を与え、レポートに反映させることにして、分からないままで終わらせないようにした。

②プレゼンテーション

プレゼンテーションの時にパワーポイントを使用する学生は西洋文明論 I, II ともに三名程度であり、少なかった。年によってはほとんどの学生が使用する学年もあるが、効果的なプレゼンテーションにするためになるべく使用させる方がよいと思われる。また、レジュメには地図や図版を載せる学生が多かったものの、何も載せない学生もおり、その国の地図や周辺の地図がないと理解しづらいため、掲載するよう指導すべきであった。一人 15 分発表することを注意事項で示していたが、各自のプレゼンテーションが 15 分よりも短くなる場合が多かった。まれに話が長く 15 分を超える場合もあったが、時間内に終わらせようと省略したのか時間が余ってしまうケースが多かった。その際、不公平にならないように全員に余った時間に何か付け足しをしてもらったり、教員の方からの質問に答えてもらったりして 15 分発表をさせ、内容を深めてもらった。発表の内容が薄いと他の学生があまり質問することがなくなってしまうため、より詳細に説明させるようにした。ただ、すべて発表を終えた後から説明を追加すると、はじめにからおわりにまでの構成が崩れて、内容がわかりにくくなる面もあり、事前に時間を計って予行演習をさせるなど、きちんと準備をするよう指示すべきであった。それでも、この授業全体としては、一人一回全員に調査内容の発表をさせたため、時間外学習による文献を使った調査、資料・レジュメの作成、プレゼンテーション能力の向上に効果的であったと思われる。

③質疑応答、ディスカッション

質疑応答は、基本的に名簿を用いて教員が指名して全員が発言できるようにした。最後に、学生がまだ質問していない部分について教員の方から質問を行った。このように名簿を使用してこちらから指名していく方法では、挙手した学生を当てて質問してもらうよりも、全員が平等に発言しクラスに参加できるメリットがある。その反面、積極的に質問する姿勢や意欲がなくなるとも考えられる。また、全員が一人一人発言するので時間がかかり、もっと履修者の人数が多い場合は時間が足りず、全員が発言する機会が持てなくなる恐れがある。教員も議論を深化させるよりも、時間内に終わらせることに務めがちになるであろう。今後は、数人に自分から質問してもらった上で報告者が回答し、それから数人のグループで意見交換し各自の意見を必ず述べるようにするという形も提案したい。また、全員にコメントペーパーを書いてもらい、それらの内容を教員がまとめて報告者にフィードバックすることも可能であろう。

このほかの課題として、報告の準備がしっかりできている学生とそうでない学生に差がみられた。準備が不十分であると、学生からの問いに「分からない」という返答になりがちで、その都度、教員が今後何をどこまで調べるべきかアドヴァイスした。また、教員も授業には地図帳と『世界年鑑』を持参して、各国の基本事項については説明できるよう準備し、報告者の学生の代わりに回答することもあった。

④レポート

報告内容を集中して聞いて理解を深めてもらうため、授業の終わりに発表に対するコメントペーパーを書いて提出してもらった。発表者には実際にプレゼンテーションを行ってみた感想や反省をまとめてもらった。時間内に終わらない場合は翌週までの宿題とした。最後に、学期末には各自の発表をもとに、質問やコメントされた部分を含めて調査し直してレポートにまとめて提出させた。字数は図版を含めないで 5600 字程度を課し、最低 5 冊以上の参考文献リストをつけることになっており、詳細に調査しなければ執筆できない分量に設定した。このレポート作成によって、受講者は発表内容を振り返るとともに再調査を行って内容を改善するため、発表だけで終わるよりも、西洋史理解がより深まったと考えられる。

５．おわりに

全体的にこの授業は学生による発表形式であり質疑応答も活発に行われ、アクティブ・ラーニングを取り入れることが出来たように思う。ただ、テーマ設定、プレゼンテーションのやり方、質疑応答の方法において、さらに工夫が必要であろう[4)]。今後は発表や質疑応答のみならずグループ・ディスカッションを取り入れたい。また、引き続きレポート課題を与えることによって、学生の調べ学習、時間外学習、表現能力の向上を図っていきたい。

【注】

１）溝上慎一、7 頁。

２）当初、「アルゼンチンの多様な文化」という漠然としたテーマであったが、農業に絞るよう指示してレポート作成の段階で変更された。

３）最初は候補に挙がっていないアゼルバイジャンであったが、参考文献がないため、急きょ文献が豊富なインドに変更することになった。

４）口頭での表現法、ディベートの進め方、プレゼンテーションのコツ、プレゼンテーションに対する評価シート、およびグループワークの技法については、佐藤浩章編、122-138、139-143 頁を参照。

【参考文献】

甘利弘樹「外国史・世界史授業のアクティブラーニング化への試み（1）－中国史を中心に－」『教育実践総合センター紀要』no. 34 (2016 年)、49-64 頁。

佐藤浩章編『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部、2010 年。

中谷功治「大学における授業展開の事例研究－「西洋史概説」の講義から－」『総研ジャーナル』（関西学院大学総合教育研究室）vol. 91（2008 年）、1-10 頁。

堀内隆行「西洋史と日本史をどう結ぶか」『社会の学び方』（平成 24 年度文部科学省「知識基盤社会の教育を担う教員養成プロジェクト」報告書）2013 年、177-189 頁。

溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014 年。

『世界年鑑 2016』共同通信社、2016 年。